

学 位 論 文 題 名

日本語に基づくテンス・アスペクト体系の研究

ーアスペクチュアリティーの単語独立性を中心としてー

学位論文内容の要旨

本論文は、現代語及び古典語の日本語テンス・アスペクトの意味記述に際して、適当な枠組みを作ることを目的としている。従来、日本語話者にとって感覚的に記述されて来た用語を、普遍性のある枠組みで捉え直すことを目指している。

尚、本論では「テンス」「アスペクト」は形態上の概念であり、意味上の概念は「テンポラリティー」「アスペクチュアリティー」と呼ぶ。

第1章では、テンポラリティー、アスペクチュアリティーを考察する前提として、その周辺分野である「語り手」「視点」の問題、「眼前描写文」「状況説明文」、「有題文」「無題文」の問題に触れる。

第2章では、汎言語的な意味概念が現代日本語の形態の上でどう反映するかを論じる。テンポラリティー・アスペクチュアリティーとテンス・アスペクトの関係上、「パーフェクティブ」「インパーフェクティブ」、「パーフェクト」「非パーフェクト」、「過去」と「現在」と「未来」、の3項目を取り上げる。

第3章では、2章で話題となった問題を解決するために、「アスペクチュアリティーの単語独立性」を主張し、それに基づく枠組みを提唱する。

第4章では、日本語の文法形式上のパラダイムに従って、現代語・古典語の各文法形式の意味を抽出する。

第5章は、結論である。

従来のテンス・アスペクト論において「未来」「過去」と呼ばれてきた用法には、現在と関わりのある用法とない用法がある。そこで、現在と関わりのある過去を「完了」と呼ぶのと同様に、現在と関わりのある未来を「非完了」と呼ぶ。形式が二項対立(タ形―非タ形)なのに意味が三項(過去・現在・未来)になり、また「現在」と「未来」とが同じ形式で表されるという「非過去」の多義性の問題は、タ形―非タ形の対立に従って、「過去」―「未来」、「完了」―「非完了」の二項対立の図式で考えることにより解決する。

動詞は、基本的に単一の変化を表す。但し、変化自体を表したり、変化の後の状況を表したりする。「アスペクチュアリティー」には、「パーフェクティブ」と「インパーフェクティブ」がある。上の「動詞」の規定で、「変化自体」が「パーフェクティブ」に相当し、「変化の後の状況」が「インパーフェクティブ」に相当する。また「インパーフェクティブ」の中にも様々な意味内容の違いが認められる。そこで本論では「パーフェクティブ」

と「インパーフェクティブ」を合わせて7種に分類する。

パーフェクティブの分類	インパーフェクティブの分類
結果が「状態」の動詞	「状態」を表す動詞
結果が「持続」の動詞	「持続」を表す動詞
結果が「進行」の動詞	「進行」を表す動詞
結果を持たない動詞	

上のように動詞のアスペクチュアリティーを単純に規定するためには、動詞の表す意味が開始前から終了後までの複雑な転変を全て含み込むとする分析では不可能である。そこで本論では単純化のために、「アスペクチュアリティーに関する単語独立性——同じ形態の用言がアスペクチュアリティーによってそれぞれ別の用言として見られること」を指摘して解決を図る。これによって、同じ動詞で複数の動詞分類枠に跨がってしまうため、動詞を分類することができない、という「動詞の多義性の問題」と、同じ語形で複数のアスペクチュアリティーを実現してしまう、という「アスペクチュアリティーの多義性の問題」が同時に解決される。

しかし「アスペクチュアリティーの単語独立性」を認めると、同じ語形の動詞が共通する一連の出来事の一部を分担し合っている諸相を表すための枠組みが必要となる。それを次のように規定する。

開始前	変化直後を表す「した」 持続を表す「している」 持続を表す「する」 変化直前を表す「する」
開始後終了前	変化直後を表す「した」 進行・持続を表す「している」 進行・持続を表す「する」 変化直前を表す「する」
終了後回復前	変化直後を表す「した」 持続・状態を表す「している」 持続・状態を表す「する」

上の枠組みからすれば、「ドアを開けたが、開かなかった」のように、開始前を表す「した」の用法が、例外扱いせずに説明できる。「開始前」の局面でも、「開始後終了前」や「終了後回復前」の局面と同様に「した」の形が使えることに何の不思議もない。また、「している」の「動作継続」と「結果継続」の違いは、「開始後終了前」か「終了後回復前」かの違いで捉えられている。

以上を理論面の骨子として、現代語及び古典語の用例を具体的に分析している。現代語の用例はよく読まれている小説や歴史書から丹念に採集されており、古典語の用例は平安時代の形態が確認し得る確実な資料から採集されている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 石 塚 晴 通

副 査 教 授 宮 澤 俊 雅

副 査 教 授 門 脇 誠 一

副 査 教 授 小 野 芳 彦

学 位 論 文 題 名

日本語に基づくテンス・アスペクト体系の研究

－アスペクチュアリティーの単語独立性を中心として－

本論文は、現代語及び古典語の日本語テンス・アスペクトの意味記述に際して、適当な枠組みを作ることを目的としている。従来、日本語話者にとって感覚的に記述されて来た用語を、普遍性のある枠組みで捉え直すことを目指したものである。

従来のテンス・アスペクト論において「未来」「過去」と呼ばれてきた用法には、現在と関わりのある用法とない用法がある。そこで、現在と関わりのある過去を「完了」と呼ぶのと同様に、現在と関わりのある未来を「非完了」と呼ぶ。形式が二項対立（タ形―非タ形）なのに意味が三項（過去・現在・未来）になり、また「現在」と「未来」とが同じ形式で表されるという「非過去」の多義性の問題は、タ形―非タ形の対立に従って、「過去」―「未来」、「完了」―「非完了」の二項対立の図式で考えることにより解決している。

動詞は、基本的に単一の変化を表す。但し、変化自体を表したり、変化の後の状況を表したりする。「アスペクチュアリティー」には、「パーフェクティブ」と「インパーフェクティブ」がある。上の「動詞」の規定で、「変化自体」が「パーフェクティブ」に相当し、「変化の後の状況」が「インパーフェクティブ」に相当する。また「インパーフェクティブ」の中にも様々な意味内容の違いが認められる。そこで本論では「パーフェクティブ」と「インパーフェクティブ」を合わせて7種に分類している。

動詞のアスペクチュアリティーを単純に規定するためには、動詞の表す意味が開始前から終了後までの複雑な転変を全て含み込むとする分析では不可能である。そこで本論では単純化のために、「アスペクチュアリティーに関する単語独立性——同じ形態の用言がアスペクチュアリティーによってそれぞれ別の用言として見られること」を指摘して解決を図る。これによって、同じ動詞で複数の動詞分類枠に跨がってしまうため、動詞を分類することができない、という「動詞の多義性の問題」と、同じ語形で複数のアスペクチュアリティーを実現してしまう、という「アスペクチュアリティーの多義性の問題」が同時に解決されている。

しかし「アスペクチュアリティの単語独立性」を認めると、同じ語形の動詞が共通する一連の出来事の一部を分担し合っている諸相を表すための枠組みが必要となる。それを、「開始前」「開始後終了前」「終了後回復前」という枠組みを設定し、「開始前」の局面でも、「開始後終了前」や「終了後回復前」の局面と同様に「した」の形が使えることを合理的に説明している。また、「している」の「動作継続」と「結果継続」の違いは、「開始後終了前」か「終了後回復前」かの違いで捉えられている。

本論文は、現代語及び古典語に亘る日本語のテンス・アスペクトの意味記述の枠組みを、体系的に設定し得ている。アスペクトとアスペクチュアリティとを分けて分析する著者の見解は、既に学界でも高い評価を得ており、本論文に於いてテンス・アスペクト全般に亘る独自の枠組みを示し得たことは、著者がこの分野の第一線の研究者となり得ていることを示している。

400 字詰にして 740 枚に相当する大部な申請論文中には、時に慎重さに缺ける記述が散見し、また古典語と現代語とをつなぐ中世語の観察を缺く等気懸りな点は有るが、この分野の研究の最前線を示していることは疑い無いところであり、十分に審議した結果、全員一致して福沢将樹氏に博士(文学)の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。